1947年 CIAM 第 6 回会議に関する言説を通して見られる MARS (Modern Architectural Research) グループの 戦後 CIAM 活動への役割について

イギリス近代建築運動における MARS グループの活動に関する研究
1933年から1957年までを中心に その2

ON THE ROLE OF THE MARS GROUP IN THE POST-WAR CIAM ACTIVITIES THROUGH THE DISCOURSES OF THE CIAM 6 CONGRESS IN 1947

A study on the activities of the MARS group in English modern movement
in architecture from 1933 to 1957 Part 2

渡辺 研 司*

Kenji WATANABE

This research is a part of study on the characteristics of the English modern movement in architecture through the activities of the MARS Group from its forming in 1933 to the disbanding in 1957. It shall be focused on the role of the MARS Group and the arguments on the CIAM activities in the post-war period, especially in the CIAM 6 Congress held in England in 1947 through analysing the discourses on the congress.

Key Words : MARS Group, English modern movement in architecture, CIAM6, Giedion
マース・グループ、イギリス近代建築運動、シラム6、ギーディオン

1 序：研究の目的及び既往研究の検討

本論文は、近代建築国際会議組織（以下CIAM）のイギリス支部である近代建築研究グループ（以下MARSグループ）を近代建築史の枠組みの中に位置づける研究の一部をなすものである。

本研究の全体構成を概説すると、次の二点が研究の主題と方法となる。主題は、第二次大戦前後を通してイギリス近代建築運動におけるMARSグループの活動の役割と評価、そしてその近代建築史上の位置づけを行いながら、既往のイギリス近代建築史研究において十分に行われていない、MARSグループの活動とヨーロッパ諸国、アメリカとの関係を通じたイギリス近代建築運動の特質を解明することである。そして、CIAMの既往研究において未だ行われていない、MARSグループが主として関わった戦後のCIAM会議に関する史料読解がその方法となる。本論文には、この主題のうち、第二次大戦後のMARSグループの活動の評価と、方法として、1947年イングランドのブリッジウォーター（Bridgewater）で開かれたCIAM第6回会議（以下CIAM6）に関する史料読解が含まれている。

ところで、近代建築史の既往研究においてCIAM6を取り扱っているものは少ない。一つの理由としてこの会議が第二次大戦直後の混乱期に行われ、単に戦前のCIAMの活動の再確認にすぎなかったという先入見が存在していることがあげられる。また、史料的な意味に

において、ジークフリート・ギーディオンによって1952年に出版された『A Decade of Contemporary Architecture』（以下現代建築の10年）¹⁾と1958年の『Architecture you and me』（以下現代建築の発展）²⁾が存在し、その記述が会議の内容を示すものとして取り扱われていることがあげられる。この度、MARSグループの中心メンバーであった、イエノー・ゴールドフィンガー（Erno Goldfinger, 1902-87）の英国王立建築家協会（以下RIBA）付属図書館にあるアーカイブで、CIAM 6開催後に出版されたプログラム報告とMARSグループによる報告書の存在と³⁾、チューリッヒにあるスイス連邦工科大学（ETH）の建築史・建築論研究所が所有する、CIAMおよびギーディオンのアーカイブで、MARSグループとギーディオンとの書簡が確認できた⁴⁾。それらの書簡における記述とCIAM6のプログラムを中心とした出版物における内容の差異を分析し、MARSグループそしてギーディオンが戦後のCIAMの活動の出発点としてCIAM 6において何を意図し、それがいかに変化していったのかを考察し、またそれがイギリス近代建築運動においてどのような意義をもつのかを明らかにすることが本論文の目的である。

次に本論文と既存史料、既往研究との関係について述べる。戦前におけるCIAMのドキュメントとしてその活動のすべてを記録したマルティン・シュタインマン（Martin Steinmann）による『CIAM

* AA スクール大学院歴史理論博士課程 工修
AA グラジュエイトディプロマ

Architectural Association Graduate School
History and Theory Ph. D. Course M. Eng. AAGrDip

Documente 1928-1939』が存在する⁵⁾。一方、戦後の活動については、正式にプログラムの冊子として出版されたものとして1951年のCIAM第8回、1956年のCIAM第10回会議があり、また簡易出版としては1949年のCIAM第7回、1953年のCIAM第9回会議のプログラムが存在しているが⁶⁾、シュタインマンによる編集に該当するようなまとまった史料は、戦後については今のところ出版されていない。

戦後を扱った既往研究、論文としては、1992年にイタリアの建築雑誌Rassegna 52号において『The Last CIAMs』と題された特集が組まれている。その中で特にヨス・ボスマン(Jos Bosman)による論稿は戦後の政治的、文化的なCIAMの活動を知る上では重要なものといえる⁷⁾。

また1983年に展覧会のカタログとして出版されたアウケ・ファン・デア・ヴォウト(Auke van der Woud)によるCIAMは戦前、戦後を通してその活動が詳細に解説されており、CIAMの活動を通史的に概観するうえでは貴重な資料といえる⁸⁾。

MARSグループを通した戦後CIAMへの論考は、ジョン・ゴールド(John Gold)による『The experience of modernism』の第8章、DREAMS AND FALSE EXPECTATIONS, Recovering the agendaが存在する⁹⁾。しかしながら、上記の研究、論文においては、いずれもCIAM 6に対する扱いは十分ではなく、ギーディオンの著作とは異なるプログラム報告の存在に関しても言及はなされていない。

2 ドイツ・フランスを中心としたCIAM内の政治的問題

まずCIAM 6がいつからどのように準備されてきたのかを、戦前のCIAMの活動をドイツ、フランスを中心とした政治的文化的視点から検討する。

第二次世界大戦の開始を1939年のナチスのポーランド侵攻とするなら、開戦以前に最後に行われたCIAM会議は、1937年パリでのCIAM第5回会議(以下CIAM5)であり、そのテーマは住居と余暇(Logis et Loisirs, Dwelling and Recreation)であった¹⁰⁾。ナチスの勃興により、ドイツのCIAMグループは、当時解散状態にあり、その中心的存在のヴァルター・グロピウスは1934年から活動の場をロンドンに移していた。1933年の第4回会議までは、CIAMの活動には、会議記録の言語表現の差異に見られるように、フランスとドイツ、ラテン文化とゲルマン文化という大きな二つの文化的構造が存在していることはいくつかの論文で指摘されている¹¹⁾。その一方のドイツという極が政治的に破壊されたことにより、1937年のCIAM 5は、フランス、ラテン文化を代表するル・コルビュジェ色の強いものとなった。会議の内容は、ル・コルビュジェ、ホセ・ルイ・セルト、それにル・コルビュジェによって任命されたポーランド人建築家ジモン・シルカス(Szymon Syrkus)が、基調講演を行っている。また他の講演のほとんどすべてがル・コルビュジェによって選ばれたものであった。この政治的確執をCIAMの事務局長(セクレタリー)であったギーディオンは、会議の公式刊行物で次のように言っている。

「CIAM内部には二つの対立する潮流が存在する。・・・この潮流の一つは事実の綿密な分析から出発し、暫時、新しい現実の具現に努力している。この潮流は、これまでのほぼすべての会議において、その方向性を刻印している。・・・これはとりわけ分析的方法の形式

を好むドイツ人、オランダ人、そしてスイス人に負っている。もうひとつの方向は、高所から出来事に直面し、新しさに対する包括的な概念を選択することを好む。この方向はフランス人、スペイン人、ポーランド人に代表される。」¹²⁾

一方、MARSグループからのCIAM5への参加は、会長(チェアマン)のウェルズ・コートツ(Wells Coates, 1895-1958)、マクスウェル・フライ(Maxwell Fry, 1899-1987)、ピーター・モートン・シャンド(Peter Morton Shand, 1888-1960)が出席している¹³⁾。MARSグループとしては、1933年のグループ結成当時から課題であったロンドンの都市計画において、主に不良住宅地区の問題について発表を行っているが、前述したようにル・コルビュジェ勢力の台頭により、印象の薄いものとなっている¹⁴⁾。

しかしながら、フランス対ドイツというCIAM内での政治文化的闘争についてコートツは、初めて出席した1933年のCIAM第4回会議での印象として、この問題をMARSグループの会合においてすでに報告している¹⁵⁾。さらにコートツは、1935年にアムステルダムで行われた現代建築の問題を協議する国際委員会会議(以下CIRPAC)での様子を次のようなエピソードを交えて報告している。

「会議に提案される作品が、ポーランドとスペイングループ(ワルシャワ、バルセロナ)によって行われたものに偏向していることが会議のはじめからはっきりしていた。これに対してドイツ語圏の代表から異議があり、彼らの作品を芸術家きどりのものとして擲論した。最初の詩(ドイツ語):すべてが分析、会議も分析、最大から最小、スタイガーとヘス 二番目の詩(フランス語):前から見ても後ろから見ても、みんな芸術家きどりじゃないんだ、彼らは今すべてを計画する。5年もかけて、ジオンナル計画、彼らは今すべてを計画する。」¹⁶⁾

この報告から、コートツは、このCIAMに見られる政治的確執を傍観する立場にあり、MARSグループとしてはこれに荷担する必要はないと判断していることがわかる。このイギリスMARSグループの中立的姿勢は、戦後の活動を考える上で多くの示唆を与えるものであるが、とりあえずここでは留保しておく。

また、CIAMの設立と同時に存在した政治的確執は、矢代真己氏の考察によれば、CIAMの組織名に露呈しているという。戦前のCIAM会議においては、公式言語としてフランス語とドイツ語が採用されたのであるが、CIAMの組織名としてフランス語では、『Congrès Internationaux d'Architecture Moderne』と近代建築を意味する語としてArchitecture Moderneが用いられている。これに対してドイツ語では、『Internationale Kongresse für Neues Bauen』とNeues Bauenとして近代建築をとらえている。矢代氏は、このBauenというドイツ語を近代建築を芸術として認識するか否か、その認識を明確にした用語であり、ドイツ語で建築を意味するBaukunstから、芸術を意味するKunstを排除したものと理解されると指摘している¹⁷⁾。この政治的文化的確執には、建築が内包する芸術性と技術性(科学性)という二元論が問題になっていることが明らかである。

CIAM内での政治的確執を指摘したスイス人ギーディオンは、前述した引用において、スイスをドイツ語圏に属すると自ら述べているように、近代建築を分析可能な技術的科学としてとらえているといえる。しかし、ギーディオンの建築史、美術史研究の師

がヘーゲル派のハインリッヒ・ヴェルフリン(Heinrich Wölfflin)であることを考慮すると、彼の思想の根底においては、建築を人間の内部的必然性により、自律的に変化するというヘーゲルの歴史観に基づく芸術として認識していたといえることができる¹⁸⁾。そのギーディオンの建築に対する認識が一気に露呈するのが、第二次世界大戦の終焉から戦後CIAMの活動へと移行する時代において、彼によって主導された新しい記念性：ニュー・モニュメンタリティ(New Monumentality)と名付けられた運動である¹⁹⁾。このことは4章で詳述する。

3 1940年代戦中期におけるMARSグループの活動

次に1938年以降のイギリス国内におけるMARSグループの活動を概説する。1938年1月にMARSグループによって行われた『新建築展』は、ヨーロッパの近代建築、特にル・コルビュジェ色の強い近代建築のイギリスでの啓蒙の機会として重要な役割を果たした²⁰⁾。

一方、1938年以降、ヨーロッパ大陸の国々と同様にイギリス国内も戦争に対する危機感が増し、グループによる国際的(対外的)な近代建築運動は急速に衰退しはじめる。CIAM 5 開催後、約10年間に渡りCIAM会議は行われていないように、ヨーロッパのCIAMグループの活動は戦争という危機により影を潜めることになる。しかし、MARSグループの国内的な活動は以前にもまして盛んになっている。従来の課題であったロンドンの都市計画案作成を中心に、1940年から新たに都市計画委員会をグループ内に組織した。(表1) その成果は、1942年のArchitectural Review(以下AR)誌上での『A Master Plan for London』の発表となる²¹⁾。(図1)

図1 MARS LONDON PLAN 1942

出典Architectural Review 1942 6

これは都市計画史上有名な1943年のパトリック・アーバークロンビー(Patrick Abercrombie)によるLCC(London County Council)の『County London Plan』(ロンドン州計画)に先駆けて発表されていることが注目される²²⁾。このMARSによる計画案は、社会学的、科学的調査に結果に基づいたものであった。だが、この計画が、ヨーロッパの線状都市計画にその源流をもち、ロンドンの現状を一掃するほどの過激な案であったことと、翌年のアーバークロンビーによる計画案がそれとは反対に、田園都市から続くイギリスの正統な都市計画案として評価されたことで、否定的な扱いを受けている²³⁾。

しかしながら、MARSグループ内においては、ある意味でライバルでもあったアーバークロンビーのロンドン計画を徹底的に分析し、

表1 MARS (CIAM) 活動年表 1940-1947

活動内容(月日): 会議M 総合会議GM 定例会議AGM 中央執行委員会CEC 執行委員会EC 専門委員会SCC 展覧委員会EXC 都市計画委員会TPC CIAM 会議CIAM CIRPAC 会議 CIRPAC 講演会MARS LE 討論会MARS DI 司会者(中心人物): 参加者数: 場所: () 内は会議における重要事項 特記なき限り 会議の場所はロンドン 司会者、参加数の表示がないのは不明

1940	AGM (1.24) リチャーズ 23 (コンペ委員会、建築標準化委員会、CIRPAC 報告)、EC (2.8) ヨーク 7 (サマーソンによる非公式討論会の提案)、GM (2.8) 21 (コックスによる宣言文の発表と議論) EC (3.13) 3 (サマーソンによる討論会の企画、マーチンによるRIBAコンペ要項の批判)、SCC (7.1) 7 (建築標準化委員会の報告)、SCC (7.8) 7 (建築標準化委員会)、MARS DI (7.10) タブス(AA プロジェクト、地域計画)、SCC (7.15) 10 (建築標準化委員会)、SCC (7.22) タブス 10 (MARS 宣言書の報告)、SCC (7.29) 6、SCC (8.6) ゴールドフィンガー 6 (建築標準化委員会報告) GM+SCC (8.13) 5 (建築標準化委員会)、EC (8.16) 6、EC (8.19) 3 (MARS メンバーの出版物)、SCC (8.20) (建築標準化委員会)、MARS DI (8.23) (農業研究所報告)
1941	AGM (3.2) (グループ内予算について)、TPC (3.8) タブス 9 (都市計画委員会)、MARS DI (3.11) フライ (ロンドン都市計画) TPC (3.15) (ロンドン人口密度)
1942	TPC (1.2) 7 (RIBA 再建設委員会報告)、TPC (1.12) 6 (RIBA 再建設委員会への提案)、TPC (1.16) 6 (TPC の委員長タブスからコーンへ)、A MASTER PLAN FOR LONDON AR. に発表
1943	AGM (3.2) (戦後計画に向けてグループの政策協議)、TPC (5) コーン 13 (MARS ロンドンプランの展示)、TPC (6.11) コーン 13 (都市計画委員会)、TPC (7.2) コーン 8 (ゴールドフィンガーによる近隣警告論報告)、TPC (7.30) (LCC プランについて)、TPC (9.2) コーン 8 (都市計画委員会)、TPC (10.10) (都市計画委員会)
1944	AGM (2.16) (グループ内将来政策)、EC (4.15) 4、EC (4.26) (PEP 政治経済計画所との会合)、EC (5.10) トーマス 5、AGM (5.14) トーマス 12 (MARS NEWS no1 の報告、LCC プランの分析) EC (6.1) トーマス 3、MARS DI (6.8) 4、MARS LE ロック(コンサルタント) 12 (ミドルズバラ地域調査計画)、TPC (6.22) (LCC プランの検討) EC (6.28) トーマス 3 (MARS プランのモスクワでの紹介)、TPC +MARS LE (7.12) フング(テームズ・ダム計画)、MARS NEWS no1 出版 (1944.7)、TPC (8.8) 5 (LCC プラン)、TPC (8.17) 5 (LCC プラン)、TPC+MARS LE (8.25) モロー+ゴールドフィンガー (建築における美)、TPC (9.5)、TPC (9.14)、EC (9.29) トーマス 5 (討論会近代建築とは何かの日程) EC (10.26)、MARS LE (11.15) リング (建築規制について)、EC (11.30) (LCC プラン)、MARS PARTY (12.10)、MARS DI レイリー 200 WHAT IS MODERN ARCHITECTURE RIBA
1945	EC (1.25) 7 (USA CIAM からの報告)、MARS DI (2.17) 3 (住宅協会への提案)、住宅見学会 (2.22) (ブレイスウェイト・ハウス)、EC (2.22) 8 (MARS NEWS no2 no.3 についての報告)、MARS GROUP REPORT 2 Observations of the County of London Plan 出版 (1945.2)、MARS LE (3.20) アラップ (ボックスフレーム構造について)、MARS LE (3.26) トーマス (西アフリカにおける計画)、EC (4.5)、AGM (4.12) トーマス 22 (LCC プラン、CIAMグループニューヨーク)、EC (4.26)、MARS LE (5.30) シェファード(建築批評について) EC (5.31) 4、MARS DI (7.9) (AR誌上のロンドン市再建築)、MARS LE (7.25) シェファード(建築批評について)、MARS REPORT 3 What is Modern Architecture 出版 (1945.7) MARS LE (8.9) (シャラワグという概念について)、MARS PRIVATE 展覧会 (9.26)、MARS LE (10.1) (ブラジル建築について)、MARS LE (11.26) (ミドルズバラ計画について)
1946	MARS DI (1.5) 7 (サウザンブトン地区計画)、RIBA M (1.16) (外交委員会、IUA)、MARS DI (1.28) (近隣住区について)、EC (1.30) (CIAM との関係)、M (2.18) (最近の出版物について)、MARS DI (3.14) (外国からの建築情報)、MARS DI (3.18) (組立工法は本当に必要か)、AGM (4.2) トーマス (将来計画、MARS 命名の再考、メンバーシップ)、MARS DI (4.29) リング (ロンドン近郊の都市計画の進展)、EC (7.10) トーマス 8 (CIAM 会議、ドイツグループ、ロシア建築家、IUFA)、EC (8.25)、IUF 会議 (9.22) (CIAM と IUA の関係) MARS LE (9.25) ギーディオンの 240 (新しい記念の必要性)、MARS PARTY (9.27) 59 ソーン美術館 (IUF 歓迎)、CIAM M (9.28) トーマス、エーステレン、ギーディオンの IUA CIAM6 の内容)、MARS LE (10.25) (SATO とビルプラン、ARCH SA 建築学生組織)、EC (11.4) ハートランド トーマス 4 (CIAM、IUF 会議の報告) MARS DI (12.3) 12 トーマス (建築と普通の人) MARS DI (12.19) (建築教育、ARCH SA) M (12.17) (CIAM 6 への提案)、M+ASA (12.19) 31 (建築教育について)
1947	M (1.14) (CIAM6 の内容)、EC (1.20) トーマス 4 (CIAM6 の内容、アメリカグループからの提案) M (2.16) (CIAM 6 への提案、スイスグループとの共同)、CEC (3.3) トーマス 6 (ギーディオンの手紙)、EC (3.17) トーマス 8 (ベスナルグリーン展覧会)、AGM (4.2) トーマス 22、CEC (4.14) リング 8、M (4.22) (ギーディオンの会談)、MARS RIBA コンペティション制度改革案アラップ、タットンプラン (1947.4)、M (5.19) リチャーズ 7、CIRPAC (5.26-29) リチャーズ+リング チューリッヒ (CIAM 6 の内容)、AGM (6.30) リチャーズ 28 (CIRPAC の報告、MARS 規約の改正案、執行委員の選挙)、EC (7.14) リチャーズ 10 (CIAM6 MARS 報告の内容)、EC (7.31) プリチャード 11 (アイルランド CIAM グループ)、GM (8.7) トーマス 17 (CIAM6 予算) EC (8.25) リング 8、GM (9.1) トーマス 30 + セルト (CIAM 6 MARS 報告の内容確認)、CIAM 6 (9.7-9.14) MARS 32 CIAM 53 ブリッジウォーター(目的の確認、都市計画、建築表現、建築教育) MARS パーティー (9.15) (CIAM メンバーとの懇談)、GM (10.20) トーマス (CIAM6 の報告、出版、建築コンペ改革案)、EC (10.24) ゴールドフィンガー 8 (CIAM7 について、コルビュジェの提案) EC (11.17) ゴールドフィンガー 6 (CIAM サマースクール、チューリッヒ AA サマースクールの報告)、GM (11.24) カドベリープラン 15 (MARS 規約の発表、建築コンペ改革案)、EC (12.4) サミュエル 9 (コンペ報告、CIAM スクール、CIAM7)、EC (12.15) リチャーズ 15

会議の参加者数はMARS グループのメンバーの数を示す。下線は本論文と関係する事項。

この年表は、RIBA 付属図書館、AA スクール付属図書館にあるMARSアーカイブの史料をもとにして筆者が作成した。

議論を重ね、1945年2月に前年から出版を開始したMARSグループの会報誌 (Bulletin)の第2号に『Observation on the County of London Plan』という特集を組む²⁴⁾ (図2)。同年末には、会報の編集委員であったゴールドフィンガーによってペンギン・ブックスからレポートとして公に出版されている²⁵⁾。

MARSグループの戦中のもう一つの大きな活動としては、1944年にRIBAで『What is Modern Architecture』(近代建築とは何か)というテーマの公開討論会が行われたことがあげられる²⁶⁾。

図2 MARS 報告第2号表紙

図3 MARS 報告第3号表紙

出典 共にGoldfinger Archives RIBA

この討論会がもつ意味は、1938年の展覧会でイギリスの一般大衆にヨーロッパ大陸の近代建築を紹介することに成功したのを機会に、そもそも近代建築とはいったい何なのかという問いが、グループのメンバーによって行われるというように、グループ内において自己批判の土壌が確実に生まれつつあったことがあげられる。またこの討論が一般大衆にも公開され、その経過を会報の第3号として出版していることが、大衆性と公開性という平等思想に根付く近代建築のイギリスでの受容形のある側面を示している。(図3)

この討論会において、戦後MARSグループの会長となるマーク・ハートランド＝トーマス (Mark Hartland-Thomas, 1905-73)²⁷⁾と、戦前からグループのメンバーであった構造物家のオヴ・アラップ (Ove Arup, 1895-1988)の発言は、戦後のMARSグループの活動を考察する上で極めて重要な意見だといえる。ハートランド＝トーマスは、アメリカから討論に参加したキャプテン・スーンタブ (Captain Soontup)の意見に言及して機能主義を広義に捉えようとしている。

「彼の言葉は私の琴線に触れました。それは、近代建築とは、建築がそれぞれ個々の問題に対してその解決に向かって機能するという機能主義、つまり、美学と科学の統合である、という彼の言葉です。・・・私は、建築には文明を表す重要な表現形態があるのだと信じています。・・・建築は、美という感情的真実を表現すると同時に、時代がもつとくに科学から得られるのすべての知識を動員して表現されなければならないと信じます。・・・建築は建築における専門家に存在するだけでなく、通りを歩く一般の人々にこそ所属するのです。この認識に世界への理解を付け足すことで建築は、人間性 (ヒューマンイズム) を満たす新たな建築となるのです。」²⁸⁾

一方アラップは、哲学、科学、数学に言及し、建築を近代の必要性を満たす科学的側面から捉える。

「科学の発達、現在ではそれに関わる人々のチームワークにかかっているのだが、建築の場合は、まさにこのことがあてはまります。建築は、過去においては、それに関係するすべての諸事を含んだも

のであり、建築家、施工者、技術者、設備技術者、積算士などは、すべてひとりの人間に統合されていたのです。しかし新たな建設技術、科学が、専門性を増し、発展しているが現在の否定しがたい事実であります。・・・近代建築も、この新たな技術的発展の波のなかにあり、新しい材料、建設工法が取り入れ、そして近代の必要性を満たすことになるのです。これは美学の価値観への問いではありませんが、近代建築を定義するうえで根本的な性格だと考えます。・・・新しい技術はそれ自体近代建築をつくるものではありませんが、いかなる建築も、近代の技術的利器を活用することなしには、それを近代建築と呼ぶことはできないでしょう。つまり効率性こそ近代建築における最大の要因です。」²⁹⁾

戦前CIAMに存在した近代建築を巡る芸術と科学への確執は、このMARSグループの中心的メンバーの二人の意見を見る限り、いくぶん科学 (技術) への信頼が強いものの、その二項を統合しようとする意図があることが読みとれる。この討論会で議論された近代建築のもつ問題点、建築の芸術性、科学技術性、建築生産の共同性の3点は、1947年イングランドのブリッジウォーターで戦後初めての会議として開かれたCIAM第6回会議の主要テーマに繋がっていく。

4 CIAM 6の準備過程と言説にみられる差異について

次にCIAM 6がどのような準備を経て開催され、また内容はいかなるものであり、その記録に見られる差異とは何かを、ギーディオンとMARSグループとの書簡を中心とした一次史料をもとに具体的に検証する。

CIAM 6の開催の提案は、戦争によって活動が中断される直前の1938年7月10日にブリュッセルで行われたCIRPACにおいて、その開催場所と内容が議論されている。このCIRPACで提案されたCIAM 6の内容は、機能都市、アテネ憲章の適用、となっている。MARSグループのメンバーである、ウィリアム・タットン＝ブラウン (William Tatton-Brown, 1910-97) はCIRPAC会議での模様を以下のように報告している。

「CIAMによって第6回会議での発表を、3回目のテーマとなる機能都市をアテネ憲章の適用と題して行うことになった。各都市にはそれぞれの問題がある。これらは今のところ各グループがそれぞれの方法によって研究調査を行っているのだが、各グループ間のつながりの欠如がこの作業を難しくしており、この支障を取り除くことが成功への鍵となるだろう。それゆえCIAMは次のような提案をしている。すべてのメンバーあるいはグループは、彼らが各都市の最も興味をもち、また緊急を要する問題に対して、理論的な基盤をもった計画案を用意する。それらは、以下の通りである。

(1) 計画案は、本部側から送られる統一された企画によるモデルプランに準ずる。(2) 現状に基づき、その実現の可能性と方法を提示する。これは、その案が現在の規制に従うことを意味するものではない。(3) グループによって提案された計画案と研究調査は、上記の制限を持ったものでなければならない。(4) 発表の後、それらは第6回会議の記録として、『アテネ憲章の適用、第2部総合』と題して出版される。(5) すべての計画案は異なる都市について行われるが、共通の方法により、異なる条件下においても同様の計画案が適応する可能性をもつことになる。これは特殊的解決を補完する普遍的提案となるだろう。」³⁰⁾

以上のように1938年のCIRPACで行われたCIAM 6 準備会議では、CIAM 5 においてコルビュジェによる個人的関心に傾斜した議論を、もう一度アテネ憲章を軸にした各都市への具体的適用に焦点を当てた会議として計画されていた。また、この時点において戦後1949年以降のCIAM会議において具体化された、都市計画案に対する共通の方法論（提案方法、研究調査方法のひとつで戦後CIAMグリッドとして採用された）が提案されていることが注目される。

次にもう一つのCIAM 6 開催の要因となった事象を検証してみる。それは、前述したギーディオンによるニュー・モニュメンタリティ（新しい記念性）という運動である。1938、39年度にハーバード大学での講義をもつことになったギーディオンは、渡米後、1943年にニューヨークにおいて画家のフェルナン・レジェ（Fernand Léger）、セルトとアメリカ抽象美術家団体の出版する刊行物の執筆のために『記念性の九原則』という共同見解を作成している³¹⁾。これは近代建築が失い、元来建築がもっていた記念性、社会を表現し、個人の主張を代表する象徴力を近代という新しい時代に回復することが意図されたものであった。また、ギーディオンは、建築の記念性をもつネガティブな側面も、ナチス・ドイツ、スターリンのソーシャル・リアリズム（社会現実主義）の建築を例に出して、認識していた。それは過去の様式を呼び戻すのではなく、新たな近代の記念性を作り出すことが主張されたものであった。

1946年9月、ギーディオンはMARSグループの招きにより、RIBAで『新しい記念性の必要』（The Need for a New Monumentality）、と題した講演を行っている³²⁾。ギーディオンはこの講演の前後に、MARSグループ、特にその主要メンバーで、AR誌の編集者であるジェームズ・リチャーズ(J.M. Richards, 1907-92)に、自らのいくつかの論評の雑誌への掲載を機会に、かなり熱心に美学の問題を働きかけている³³⁾。

ギーディオンによる講演の後、MARSグループによって、『建築と普通の人』と題したプライベート・ディスカッションがRIBAで行われている³⁴⁾。これは1944年来続くグループ内での勉強会、講演、討論会の一環であった。討論会の題名からわかるように、MARSグループの美学に関する問題の関心は、ギーディオンの主張する記念性というよりは、美学と一般大衆との関わりにあった。つまりギーディオンも認識していたように、記念性をとりまく美学の問題は、容易に政治と、それもナチス、スターリン下の独裁性と結びつくものであり、このことはドイツの批評家ヴァルター・ベンヤミンのいうナチズムとは政治の審美化（美学）である、と指摘するところである³⁵⁾。MARSグループの美学への抵抗とは、いわばこの民主主義を脅す美学がもつ全体主義的性格に存在しているといえる。

1947年1月にMARSグループはスイスCIAMグループと共同で、建築における記念性の問題を建築表現の現状への影響、と名称を変えCIAM6のための草稿を作成している。その案は以下大きく3つに分類されている。1 技術的發展への影響、2 社会的發展への影響、3 他の芸術への影響 この3はさらに詳細に類別され、A 建築家、画家、彫刻家との関係、B 色彩の使用、C 材料と構造の使用、D 光の使用、E 三つのカテゴリー、建築、彫刻、絵画の統合、となっている³⁶⁾。

このうちMARSグループが担当したのは、1と2であり、3はスイスグループによる作成と記されている。ギーディオンの活動は

アメリカがその中心であったが、1940年以降もスイスCIAMグループとの関係は存続しており、3番目の項目はギーディオンがアメリカで始めた新しい記念性運動の内容がそのまま適応されていることがわかる。これと比較するとMARSグループが取り組んだことは、建築の美学における表現性という問題より、その技術性、社会性に焦点をあて、建築を科学としてとらえることに重点があったことがわかる。そのような科学としての建築へのアプローチこそ、先に述べた美学が内包する危険性に陥ることなく、近代建築と一般大衆との関係を発展させることができるものであるとMARSグループのメンバーは認識していたことがわかる。

1947年5月26日から29日まで、チューリッヒでCIAM 6 会議の内容に関するCIRPACがもたれている。MARSグループからの代表は、リチャーズとアーサー・リング(Arthur Ling, 1913-?) の二人であった。リチャーズはそのCIRPACでの報告を次のように行っている。

「次回会議のテーマに関する提案の一つは、もちろんイギリスからのものである。MARSのメンバー諸君は覚えているだろうが、今までのグループ内での会議においてたびたび議論され、今年の冬に草稿が作成されたものである。CIRPAC内で議論が重ねられた結果、CIAM 6はこのMARSグループの提案する建築の表現性を含んだ、大きく二つの議題を採用することになった。……もう一つはCIAMの再組織化についてであり、これはリング氏が担当することになるだろう。……またこれら議題に対応する委員会が会議で開かれることになる。……そして最終的に各国のCIRPACメンバーによって、6回会議がMARSグループの主催により、イギリスのブリッジウォーターで開かれることが正式に決定した。」³⁷⁾

MARSグループがCIAM6の準備として行われたグループ内会議は、1947年の1月から会議前の8月まで計14回を数える。当時の会議記録を見ると興味深い事実がわかる。それは先にリチャーズがCIRPAC会議での報告として述べたMARSグループの課題と会議のために実際に行われた準備内容にずれがあることである。リチャーズはギーディオンによって提案された建築における表現性についてMARSグループ内で議論をすすめようとしたのであるが、実際には、MARSグループのCIAM 6での課題として、建築教育、都市計画法規、建設技術の3点が承認されており、7月のグループ内会議において、その課題を担当するメンバーの選定も行われている³⁸⁾。

このことは、会議後ギーディオンによって編集された『現代建築の10年』及び『現代建築の発展』において、彼が述べているように、建築における表現性の問題(美学)がMARSグループから発案され、会議においてイニシアティブが取られたという記述内容と実際は異なるということを示している。

CIAM6開催後に編集されたプログラム報告には、実際にMARSグループが行った上記3点の記録が建築教育の一部を除き、抜け落ちている³⁹⁾。(表2) つまりこれらの記録の編集の段階でギーディオンは、実際にMARSグループがおこなった報告をある意図をもって除外したと考えることができる。

5 CIAM6におけるMARSグループの役割

次に具体的にCIAM6で行われた内容を、二つのCIAM6のプログラムとMARSグループによる報告書を参照しながら、MARSグループのCIAM6での活動について考察を行う。

会議は1947年9月7日から14日まで1週間に渡り、イングランド西部の街、ブリッジウォーターで5月のCIRPACでの内容に基づいて開かれた。イギリスでの開催の理由としては、イギリスが他のヨーロッパ諸国に比べ戦争による被害が少なかったこと、つまりは戦勝国の一つであり、会議を開く経済的な余裕があると判断されたことによる。(図4)しかしそれだけではCIAM新興国アメリカでの開催の可能性もあったが、最大の理由は、MARSグループのメンバーに自国開催の強い意志があったことがあげられる。

会議で行われた内容を表にまとめてみる。(表2)(表3)これからわかるのは、前述したように建築の表現性の問題に積極的に関わったのが、MARSグループではリチャーズ一人であり⁴⁰⁾、MARSグループの会議における重点は、むしろ建築の表現性(美学)とは別のことであったことである。その事実を示すこととして、ハートランド=トーマスが会議のホスト役としてのMARSグループを代表して行った挨拶があり、次の三点にグループの会議に対する意図が表明されている。

1. MARSグループが他のヨーロッパ諸国のCIAMグループに比べて組織的なつながりが強く、戦後のCIAMの活動の中心となるであろう確信をもっていること、2. メンバーの多くが実際に仕事を持ち、その中には地方自治体、また建設研究所と関係があり、都市計画、法規制、建設技術に対して提案を行える立場にあること、3. MARSグループは戦前から展覧会、ロンドンの都市計画提案などの活動を行ってきたが、この会議においては上の第2点の問題について特にこれからの指針、報告を行うこと、となっている。この挨拶では、建築美学そして建築表現に関しての言及は行われていない⁴¹⁾。

コミッション1の報告においては、ロバート・タウンSEND (Robert Townsend, 1911-?)によって建設技術その1として、材料と工法が、またローウェリン=デービス(R. Llewelyn Davies 1912-81)によって、その2として、戦後の建設需用として考えられた、住宅の規格化と量産化に関して報告が行われている⁴²⁾。

ル・コルビュジェを司会としたコミッション3Aの都市計画の問題において、リングは、過去10年間のイギリスでの都市計画法案の変遷とその問題点を三つの重要な報告、バロー・リポート(Barlow Report)、スコット・リポート(Scott Report)、ウスワット・リポート(Uthwatt Report)に触れながら詳細に報告している⁴³⁾。

図4 CIAM6での参加者の記念写真

第1回会議の際の記念写真は有名であるが、CIAM会議においてコルビュジェとグロピウスが一緒に写っているものはこれが最初で最後と思われる。前列左端がコルビュジェ、前列右から6番目がグロピウス、中央にギーディオンとセルトの姿がある 出典Architectural Design 1947 10

表2 CIAM6に出席する国とギーディオンによる口作における記述の寄与を示す表

CIAM6に出席する国	ADCA	AYM	国	寄
CIAM6 プログラムの内容				
1 Photograph	△			プログラムに記述口には2枚付口し
2 Names and Addresses	X			口口出口口の名口
3 CIRPAC meeting May 1947(Richard/Ling)	X			CIRPAC 口口の口口
4 Press Communiqué 1 (J.M.Richards)	X			プレス口口伝文
5 Questionnaire to secretaries of groups	X			
6 Programme	X			口口口口口口口口
7 Commissions: membership	X			口口口口のメンバーリスト
8 Reports of Commissions: 1				
9 Reaffirmation of Aims Commission 1 (definitive English text reworded J.M.Richards)	○			ADCAにはフランス口口口口口口
10 Reorganisation Commission 2	X			CIAM口口口口口口
11 Urbanism: Commission 3a				
Preparation for CIAM 7	○			ADCAにはフランス口口口口口口
Questionnaire	X			口口口口、口口口口レベルの口口口口口口口口
12 Architectural Expression: Commission 3b				
Questionnaire	○			ADCAには一口口口口口口口口口口
Architectural Expression by J.M.Richards	△			フランス口口口口口口
Second part of questionnaire (Le Corbusier B. Hepworth A. Eyck)	○	○		ADCAコルビュジェによる口口口口口口口口口口、口口口口口口
13 Commission 3a and 3b (H.Thomas)	X			口口口口口口
14 Architectural Education: Commission 4				
15 Summary of Proceedings	X			
16 Summary of Report by MARS Group(England)	△			MARS グループの口口口口口口口口
17 CIRPAC meeting 13th September, 1947				口口口口の代表リスト付口
Proces verbal de la seance du CIRPAC (Emery)	X			口口口口フランス口口
18 Press Communiqué2 (J.M.Richards)	X			口口口口のプレス口口口口
19 Illustrated article on CIAM6	X			プログラムに記述口口口口口口付口なし
20 Opening addresses by President(C.Eesteren)	○			プログラムにはなしフランス口口口口口口
MARS による口口口口				
21 Introduction of the reports by H.Thomas	X			トーマスの挨拶
22 Architectural Education in Great Britain (Johnson Marshall)	X			2ページ口口口口5ページ口口口口口口口口口口 口口口口はマーシャルによる
23 Planning Legislation in Great Britain during the last 10 years (L.ling)	X			7ページの口口口口
24 Building Technique Section 1 Materials and Methods (Townsend)	X			6ページの口口口口
25 Building Technique Section 2 Architectural Implication (Llewelyn Davies)	X			8ページの口口口口
26 Report of CIAM6 Bridgewater(H.Thomas)	○			トーマスのプレス口口口口口口
CIAM6 口口口口口口口口口口口口口口				
27 The Need for a New Monumentality	X	○		口口口口口口口口口口口口
28 Nine Points on Monumentality	X	○		口口口口口口口口口口口口口口

○記述有り△一部記述有り△記述無しADCA A Decade of Contemporary Architecture 1952 AYM Architecture You and Me 1958 会議後出版されたプログラム報告に記述されたものは12を除き、1から19までの事項、AYMには3項目を除き記述無し。この表はRIBA、ETHのMARSに関するアーカイブをもとに筆者が作成した。

表3 CIAM6におけるMARSグループの活動内容

名前	活動内容
H.カドベリー=ブラウン	糧食、食口、交通手段の口口
A.リング	コミッション3bへの口口口口、都市口口口口法についての口口口口
P.ジョンソン=マーシャル	コミッション4への口口口口、口口口口口口についての口口口口
R.タウンSEND	口口口口口口報告その1材料と方法
R.ローウェリン=デービス	口口口口口口報告その2口口口口口口
W.ハルフォード	都市口口口口口口口口口口についての口口口口
J.M.リチャーズ	コミッション3aへの口口口口、口口口口口口についての口口口口、プレス
M.フライ	西アフリカについての口口口口
J.ドリュウ	口口口口、ロンドンでの口口口口
C.エントウィッスル	コミッション3aへの口口口口、口口口口口口についての口口口口
G.ザミュエル	コミッション2への口口口口、CIAM口口口口口口についての口口口口
M.ハートランド=トーマス	グループ内全体報告、コミッション1への口口口口口口
D.ブラウン (AA学生)	出版物の口口口口口口口口

この表は、RIBAのサミュエル・アーカイブをもとに筆者が作成した

グロピウスを司会としたコミッション4の建築教育においては、タットン＝ブラウンとペルシー・ジョンソン＝マーシャル (Percy Johnson-Marshall, 1915-93)によって1840年からのイギリスにおける建築家教育の変遷と現状、外部試験制度、学費等について報告が行われている⁴⁴⁾。このMARSグループのメンバーによって行われた、都市計画法案(報告)、建築教育、建築技術の3つの報告は、とりもなおさず、戦後イギリスにおいて近代建築が根付き、発展していくうえでの重要課題であり、ニュータウンの計画及び建設、建築学校のカリキュラムの充実、建築家資格試験制度の確立、学校建築の工業規格化(CLASP)、集合住宅の量産化に結実している⁴⁵⁾。

ギーディオンによって提案された建築の表現性については、コミッション3Bにおいて、彼を司会として、事前に用意された質問用紙への解答に基づきながら議論が進められている。(図5)コミッションの委員としては、MARSグループからリチャーズとコーツが出席したが、実際に発言の記録があるのはリチャーズ一人であった⁴⁶⁾。

図5 CIAM6で意見を述べるギーディオン

出典 Architectural Design 1947 10

リチャーズの報告を概略してみる。彼が問題とするのは、ギーディオンの意図する新しい近代の記念性を建築に回復するために、建築を絵画、彫刻を統合する総合芸術の立場に置くことでなく、建築と一般大衆との関係を議論することであった。リチャーズは問う。近代建築は過去の時代に建築がもっていたように一般大衆をひとつの芸術性(モニュメンタリティ)へと先導することが必要なのだろうか。あるいは、合理的思考にもとづく標準化、量産化という科学的方法によってのみ新しい建築は可能であり、またそれが大衆の利益となるのであろうか⁴⁷⁾。リチャーズにとっては、そのどちらでもない。彼がここで強調するのは、新しい建築は、一般大衆を先導するものでもなく、大衆に自発性を促し、人間性をその基盤とした芸術と技術の統合であるということである。言葉を変えるならば、近代建築の世俗化、あるいはその態度は近代建築の底上げ(Bottom-Up)といえる。このリチャーズの問題とした近代建築の世俗化は、1951年5月4日から同年9月30日まで開催されたイギリス祭(Festival of Britain)の計画、パビリオン建築群の設計において実現しており、そこには、ギーディオンが提唱する建築家、画家、彫刻家の統合も試みられている。また、この近代建築および近代芸術の大衆化(世俗化)という問題は、1950年代からイギリスにおいて起こるポップ・アートの源流とみなすことができ、反美学という運動もニュー・ブルータリズム(New Brutalism)という運動につながっていく。この戦後のイギリス近代建築の流れについては別稿で考察したい。

ギーディオンによる会議録の編集に建築を美学、表現の問題とする意図があったことを裏付ける事実として、『現代建築の10年』の中に記述されているリチャーズの論文は、プログラムに記述されている彼の実際の発言のほぼ三分の一であり、リチャーズがCIAMの活動として評価している、科学的分析的方法論と都市計画的視点についての言及さらにイギリスにおける現状の説明に関してはすべて削除されている。ギーディオンは、戦後のCIAMの中心テーマとして美学の問題を取り上げる意図のもと、リチャーズの発言のうち建築美学に関連する、主観的表現の必要性に対する発言の部分だけを取り出しており、戦前からCIAMにおいて継続される科学的問題に関しては、その扱いを行っていないことがわかる⁴⁸⁾。

6 結 論

1947年のCIAM第6回会議をとりまく言説を分析することで次の二つのことがわかった。

第一点は、主にCIAMの事務局長であったギーディオンの働きにより、戦前CIAM内では積極的に議論されなかった建築の表現性、美学に関する問題が近代建築の新しい記念性と建築家、画家、彫刻家の統合という問題に結びつき、戦後CIAMの活動のひとつの中心となろうとしたことである。そこには、CIAMの発前から露呈していたフランス(ラテン)対ドイツ(ゲルマン)という文化的政治的確執の存在があり、建築を芸術とみなすのか、あるいは科学技術とみなすのかという二元論をめぐる論議があった。CIAM内での確執において最初から中立的な立場をとったのがイギリスのMARSグループであった。また戦後における最初の会議の指導権を握ったのもMARSグループであり、さらにCIAM6において議論されたいくつかの問題は、イギリスの戦後における近代建築の発展の起点となった。

第二点は、CIAM6のプログラムとギーディオンによる著作における記述の差異を分析することで、ギーディオンの戦後CIAM活動への意図が第一点で述べた建築の美学化にあったこと、戦前のCIAM内における科学主義を抑圧しようとする意図があったことがわかった。さらにこのプログラムにはMARSグループによるCIAM6会議での都市計画法、建築教育、建設技術に関する報告が存在しているにもかかわらず、それらもギーディオンの著作には記述されていないことがわかった。

以上の考察をまとめると、1947年のCIAM6を巡るMARSグループによるCIAM内における活動は、イギリスの地理的特徴(ヨーロッパ大陸とアメリカの間)と文化的特徴(ドイツの科学分析主義とフランスの芸術個人主義の間)を反映しており、それらの二項対立を招く要因のある種の調整役、あるいはその確執の解消役を果たしたといえることができる。

謝 辞

この論文をまとめるうえで、AAスクール大学院の研究論文指導教官であり、ケンブリッジ大学、キングス・カレッジのフェロー、Dr Nick Bullock氏およびAAスクール講師、Andrew Higgott氏、AAスクール大学院元ディレクターである、Royston Landau氏には個人指導における議論を通して多大な助言を得たこと、またETHのCIAMアーカイブの研究調査官、Bruno Maurer氏にはMARSグループに関する史料の閲覧に際して協力を得たこと、さらにワシントン大学準教授のエリック・マンフォード氏には戦後CIAMの活動に関して貴重な示唆を得たことをここに深く謝意を表します。

注

- 1) S.Giedion, A Decade of Contemporary Architecture Girsberger Zurich 1951(邦訳なし)
- 2) S.Giedion, Architecture you and me, Harvard Uni Press, Cambridge 1958(邦訳生田勉、樋口清訳、現代建築の発展、みすず書房、1961)
- 3) S.Giedion (ed) CIAM 6 Documents, Congress Internationaux d'Architecture Moderne CIAM6 1947 Bridgewater England Documents of the Sixth Congress, Goldfinger Archives RIBA
- 4) CIAM and Giedion Archives GTA(Institut für Geschichte und Theorie der Architektur) ETH(Eidgenössische Technische Hochschule) Hoggerberg Zurich MARS グループに関する史料は巻頭を中心に308点を強える。
- 5) M.Steinmann (ed), CIAM Documente 1928-1939, Birkhauser, Basel und Stuttgart, 1979 他にM.Steinmann (tras S.Brown) Political Standpoints in CIAM 1928-1933, Architectural Association Quarterly 1972 pp49-55
- 6) CIAM 8 Documents 1951 Hoddesdon England, RIBA CIAM Archives, CIAM10 Documents 1956 Dubrovnik, RIBA CIAM Archives, CIAM7 Documents 1949 Bergamo, AA Library, CIAM9 Documents 1953 Aix-en-Provence, AALibrary
- 7) J.Bosman, CIAM After the War: a Balance of the Modern Movement, The Last CIAMs Rassegna 52 1992、同特装号でMARS グループに関する論文として、R.Landau, The End of CIAM and the Role of the Britishがある。
- 8) Auke van der Woud (ed), CIAM Housing Town Planning, Delft Uni.Press, Otterlo, 1983 G.Ciucci, The Invention of the Modern Movement, Opposition no 44 1981, New York, がある。最近のCIAM研究としては、E.Mumford, CIAM and the Discourse of Modern Urbanism, PhD dissertation Princeton Uni. 1996、同、CIAM urbanism after the Athens Charter, Plannig Perspectives no7 1992.London 矢代真己、建築家マルト・スタムの思想と建築理念に関する研究、第3章 第6節 CIAMでの活動、日本大学博士論文1996 M.Schwarzer, CIAM City at the End of History in the R.E.Somol(ed) Autonomy and Ideology, Monacelli Press, New York, 1997 学会の論文報告として、上田克行、田辺建雄、鈴木一、CIAMの理想主義的近代都市計画について、昭和61年度日本建築学会関東支部研究報告上田克行、田辺建雄、鈴木一、CIAMの理想主義的近代都市計画について・その2、昭和62年度日本建築学会関東支部研究報告集、上田克行、田辺建雄、鈴木一、CIAMの理想主義的近代都市計画について・その3ー第二次世界大戦後の指向一、昭和62年度日本建築学会関東支部研究報告集、田島尚光、田辺建雄、鈴木一、CIAM以後の再出発よりその崩壊・TeamXに至るまでー日本建築学会京海支部研究報告1991年2月がある。
- 9) J.Gold, The experience of modernism Modern architects and the future city 1928-1953 第8章Dreams and false expectations Recovering agenda, E&FN Spon, London, 1997
- 10) CIAM Logis et Loisirs, Paris 1938 AALibrary
- 11) Would ibid. さらに Ciucci ibid. 矢代真己 前掲118-124ページ
- 12) CIAM Logis et Loisirs, (引用部分の訳は矢代真己による)
- 13) 14) 15) 16) Samuel Archives RIBA SaG/90
- 17) 矢代真己、前掲、118-124参照。
- 18) 井上充夫、建築美論の歩み、221ページ参照 鹿島出版会、1991
- 19) 近代建築運動における記念性の問題に言及した資料としてMonumentality and The City, The Harvard Architectural Review/IV, Spring 1984, MIT参照
- 20) The MARS Exhibition, AR 1.1938 pp109-116 Exhibition catalogue, New Architecture Exhibition, MARS Group 1938参照。
- 21) A Master Plan for London, Based on Research Carried out by the Town Planning Committee of the MARS Group, Analysed and described by Arthur Korn and Felix J.Samuely, Architectural Review 1942 July p143-150 (Destruction and Reconstruction) (シャープと合理主義の建築家たちロンドン改造のマスタープラン彰国社 1985)
- 22) P.Abercrombie and J.H.Forshaw, County of London Plan, Macmillan, 1943
- 23) E.Marmaras and A.Sutcliffe, Planning for post-war London: the three independent plans, 1942-3, Planning Perspectives, 9 1994 pp431-453参照
- 24) MARS GROUP REPORT NO2 Observations of the County of London Plan, 2.1945 MARS Archives RIBA
- 25) E.Goldfinger, County of London Plan, Peguin Books, London, 1945
- 26) MARS Public Discussion, What is Modern Architecture, RIBA December 13 1944 Chaired by C.Railly
- 27) ハートランド＝トーマスは、1938年前後にMARSに参加し、40年からRIBAの建築科学委員会の委員と同時にMARSの会長となる。49年にはMARSの代表としてCIAM7に出席している。ブリストルを拠点として、設計、教育、出版活動をした。
- 28) 29) MARS REPORT NO3 WHAT IS MODERN ARCHITECTURE, July 1945 pp30-31 pp33-36MARS Archives RIBA
- 30) Samuel Archives RIBA SaG/91
- 31) S. Giedion F.Leger J.L.Sert, Nine Points on Monumentality, in Giedion Architecture you and me, pp48-51 (邦訳 現代建築の発展 記念性の九原則 57-60ページ参照)
- 32) MARS Public Lecture S.Giedion, The Need for a New Monumentality September 25 1946 RIBA Giedion ibid. pp25-39 原稿が送られたのは1944年。(邦訳現代建築の発展 新しい記念性の必要 32-47ページ参照)
- 33) リチャーズとギーディオンとの往復書簡は1946年の駒濱を機に増え、互いの雑誌上の論文、巻頭等について意見を交換している。CIAM Giedion Archives, GTA ETH 注48)参照
- 34) Hartland-Thomas, MARS Architecture and the Common Man, Group Meeting report and Notes of Discussion, 26 11. 46.Goldfingers Archives RIBA, William Allen, MARS Group Notes on a Subject for Congress Discussion, 12 12 46. Giedion Archives, GTA ETH
- 35) ヴァルター・ベンヤミン、複製技術時代における芸術作品、好村昌士彦訳、晶文社、1970年 46ページ参照
- 36) 37) Samuel Archives RIBA SaG/91
- 38) Samuel Archives SaG/91 Goldfinger Archives GoEr/310 RIBA
- 39) CIAM 6 Documents 1947 Goldfinger Archives RIBA GoEr/310、CIAM 6 Documents 表紙にはギーディオンの名前が見られるが、実際に編集を行ったのはMARSグループのメンバー、ハートランド＝トーマスと思われる。会費後1947年の10月からギーディオンによるプログラム報告の作成を要請する書簡がハートランド＝トーマス宛に送られており、最終的にプログラム報告が出版されたのはセルトによるお礼の書簡の存在から1948年4月あたりと考えられる。Giedion Archive, GTA ETH
- 40) ハートランド＝トーマスによる報告記述の中には発案者の一人としてエントウィッスルがあるが、実際発表を行ったかどうかは定かではなく、その記憶もないが、後にギーディオンから彼の美学の問題に関する意見を伺う書簡が存在する。しかしその内容は美学には興味が無いというものであった。Giedion Archives, GTA ETH
- 41) M.Hartland-Thomas, Introduction (p4) CIAM 6 Bridgewater, Giedion Archives GTA
- 42) CIAM Sixth Congress 1947-Report of MARS Group, PART 3 BUILDING TECHNIQUE : Section1 Materials and Methods by R.L.Townsend, Section 2. Architectural Implication by R.Llewelyn Davies, GoEr/314 RIBA
- 43) CIAM Six Congress 1947 Report of MARS Group PART2 Planning Legislation in Great Britain during the last 10 years by A.Ling, GoEr/314
- 44) CIAM Sixth Congress 1947 -Report of MARS Group PART 1 ARCHITECTURAL EDUCATION IN GREAT BRITAIN (R.Townsend and P.J.Marshall) GoEr/314 RIBA
- 45) CLASP=Consortium of Local Authorities Special Programme, A.Saint, Towards a Social Architecture The Role of School Building in Post-war England Yale Uni.Press, 1987
- 46) 47) CIAM 6 Congress Programme 1947 J.M.Richards Architectural Expression pp25-29 Goldfinger Archives RIBA
- 48) ただし、ギーディオンは現代建築の10年を出版する際に、発表原稿の改訂とイギリスでの出版の可能性を前もってリチャーズに打診しているが、リチャーズからは現代建築の10年に関する題名の変更とイギリスでの出版の困難の旨の返答があっただけで、原稿の内容に關してはリチャーズはギーディオンに対して返答していない。Letters to Richards, Giedion Archive, GTA ETH

ギーディオンによる建築の技術性より、むしろ芸術性、美的関心を示す表現としては、CIAM6において発表された、「CIAMは水平線のかたに姿を現したばかりの問題に関心をもっている。1928年には建設方法の工業化に関心をもった。次には標準化、それから現代都市計画の発展がテーマであった。いまや我々は急激的に次の段階、どちらかといえば衰えたテーマである美的問題：いふなれば宿命的衰現に取り込むに至った」がある。ギーディオン、現代建築の発展、83ページ、美学に対する建築家の態度(Architect's Attitude Towards Aesthetics)

(1998年8月28日原稿受理、1999年1月28日採用決定)